

主
は、生きておられる
Unser HERR lebt

2017 **45**
graph magazine vol.

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主
は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **45** 定価100円(税込み)

メッセージ

- 4 一つのからだ 会沢道広
15 ゆずりの地への約束 吉田浩

8人の証し

- 26 主よ、あなたが、全権を握っておられます 福留伸子
34 小さな私のなまえを呼んでくださったイエス様 飯島弘雄
42 主イエス・キリストの限りない恵み 杉本文雄
53 主は私にかかわるすべてのことを成し遂げてくださいます 杉本淳子
61 「私は大丈夫」からの解放 松下たまき
70 主の手にとらえられて 西脇莞爾
77 わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの 伊藤よう子
85 感謝します、この恵みに 門倉民子

一つのからだ

会沢道広

一つの御霊・一つのからだ

二十二年前、日本各地から集まった四百名を超す兄弟姉妹が、二つのグループに分かれてドイツを訪れました。若者から九十歳を超すお年寄りまで、年齢・職業・趣味等はさまざまで、唯一の共通点は「主イエス・キリストを信じる」ことでした。

Bグループは、フリンゲンにある老人ホームを訪問しました。車椅子に乗せられた多くのシスターたちが歓迎してくれました。シスターたちの目は輝き、身体中から喜びが溢れ、私たちにもその喜びが伝わってきました。お互いに取り交わした言葉はドイツ語の「GUTTEN TAG」(こんにちは)の一言。後は

笑顔のシスターたちと握手、握手……。しばらくしてホームの校長先生の話をベックさんが通訳してくれました。ようやくシスターたちの「溢れるばかりの喜び」の理由がわかりました。なんとシスターたちは私たちの救いのために、毎日一人ひとりの名前を挙げて祈り続けていました。距離・民族・文化・言葉等すべてを超えて、四十年を超える歳月、一日として絶えることなく続いた祈り……。私たちにとってはとても理解できない、想像すらできない事実でした。

シスターたちの長い間の祈りのうちに、私たちはイエス・キリストを信じる者へと変えられたことがわかりました。

今テモテ(ベック兄)があなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、

私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。

このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。あなたがたが主にあつて堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。

私たちの神の御前にあつて、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう。私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。どうか、私たちの父なる神

であり、また私たちの主イエスである方ご自身が、私たちの道を開いて、あなたがたのところに行かせてくださいますように。(1テサロニケ 3・6-11)

シスターたちの、名を挙げて祈り続けた一人ひとりと、顔と顔を合わせ、握手を交わすことができた喜び、感動……。私たちは背後におられる主の愛を覚え、心から感謝の祈りを捧げました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(イザヤ 43・4)

私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。(1コリント 12・13)

男子も女子もありません。(ガラテヤ 3・28)

割礼の有無、未開人、スクテヤ人、…というよう
な区別はありません。(コロサイ 3・11)

聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主で
す。」と言うことはできません。(1コリント 12・3)

そこには言葉の違いも、年齢、男女の区別も、職業
も、何も関係ありません。お互いを妨げるものは何
もなく、主がすべての垣根を取り払ってくださいたの
です。

十字架

数日前、親しい姉妹が交通事故に遭いました。一命
は取り留めましたが、圧迫骨折により腰の骨が砕け
てしまいました。激しい痛みの中、救急車で病院に搬

送されました。私たち兄弟姉妹は突然の知らせに驚
くばかり…ただ祈りました。

手術の当日朝早く、姉妹からメールが届きました。
「主を賛美します。手術は八本のボルトと金具が背
骨に入ります。イエス様の十字架の愛の凄さに感謝
する恵みの時かしら…。今朝は絶食ですが、美味
しいみことばをパクパク食べました。主は私にかかわ
ることを成し遂げてくださいます。感謝しつつ行っ
てきます！」

砕けた腰の骨を人工骨と交換し、その人工骨を
金具で保護しボルトで固定するという厳しい手術
でした。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取り
のけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこ
ころのとおりにしてください。」すると、御使いが天か
らイエスに現われて、イエスを力づけた。イエスは、苦

しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしず
くのように地に落ちた。(ルカ 22・42、44)

負わせた。(イザヤ 53・5、6)

手と足にくぎを打たれ十字架に磔(はりつけ)に
され、その痛みと苦しみに耐える主の姿。弟子たち
に裏切られ、父なる神に見捨てられ…。自らの命に
代えて私たちの罪を贖ってくださいた主のご愛。

イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と
叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたし
をお見捨てになったのですか。」という意味である。

(マタイ 27・46)

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、
私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私
たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たち
はいやされた。…主は、私たちのすべての咎を彼に

十字架を見上げながら姉妹は手術室に向かいま
した。
私たちは祈り続けました。十字架上で流された主
の血が、祈りを通して私たちの身体の間々まで流れ
ていきます。主の血が私たちの罪を清めるとともに、
この世では何をもってしても決して得ることのできな
い「真の平安」を与えてくれます。

私たち一人ひとりが主を見上げ集まる時、そこに
主がおられ、教会(集会)になります。

教会(集会)はキリストのからだであり、いっさいの
ものをいっさいのものによって満たす方の満ちておら
れるところです。(エペソ 1・23)

私たちは普段、自分のことばかり考えていろいろ

なことに囚われ、思い煩い、日々悩んでいます。またいつも人の目を気にし、その歡心を買うべく努力し、疲れ果ててしまいます。心の中はねたみやひがみ、そして孤独に支配されています。本当にみじめな者です。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。
(ローマ 7・24～25)

主を見上げ主の愛に包まれる時、唯一、私たちは自我の縛りから解放され本当の自由を自分のものとすることができます。そうして主にあつて輝く者へと変えられていきます。

人が主に向くなら、そのおおいに取り除かれるので

して、彼らはすべての苦しみから救われた。

(詩篇 34・6)

主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。

(詩篇 22・24)

五時間を超える手術を終え、翌日まだ痛みの中にある姉妹からメールを頂きました。

「主をほめ讃えます。無事に手術が終わりました。手術後、麻酔を送る装置がうまく作動せず、激しい痛み』『イエス様、イエス様』と祈り叫ぶことしかできず『虫の息』の状態でした。しかしこの痛みを通して『主の十字架での苦しみと痛み』を少し経験することができました。痛みの中にながらも、いつも主に守られ平安でした。今朝は日々の歌45番を何

一つのからだ

す。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。
(2コリント 3・16～18)

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。

(詩篇 34・5)

試練を通して、私たちは主を見上げる者へと変えられます。主は私たちが悩む者であることをご存知です。主に助けを求めることをいつも願っておられます。祈り叫ぶ時、私たちは生きておられる主を体験し、喜びに満たされます。

この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こう

度も賛美しました。まだベッドの上で痛いですが、兄弟姉妹方のお祈りを感謝しています」

手術から四日後、メールが届きました。

「主をほめ讃えます。みことばありがとうございます。パクパク(みことばを食べて)おいしいねえ。昨日は体調の良い時に、小さな小さな声でたくさん賛美しました。『主イエスは平安を与え我を遣わす』…それでうれしくて涙、涙。夜中に痛みがあり、今朝はまだ微熱で薬をもらいました。先ほど体を拭いてくださった看護師さんに『私イエス様を信じているんですよ。愛されています。だからとても平安で幸せなの』と思わず口から出ちゃいました」

からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。…しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだ

の中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分とともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。

(1コリント 12:22、24、27)

姉妹の上に襲いかかった試練を通し、私たちは祈る者とされ、主にあつて一つのからだ、一人ひとは各器官であることを教えられました。どんな小さな器官でも、身体にとって不要なものは一つありません。

もし私たちが共に集う集会の兄弟姉妹の苦しみ、悲しみに無関心であるならば、私たちは主につながっているとは言えません。また兄弟姉妹の喜びを共に喜ぶことができず、ねたむ者であるならば、それは主にある兄弟姉妹とは言えないでしょう。そこには「本当の愛・平安・喜び・希望」は存在しません。主につながるものなしに、十

字架上で流された血は私たちの身体に流れてきません。兄弟姉妹のために祈る時、初めて主の血が私たちの身体に流れ、私たちは主にあつて一つであり、それぞれが主をかしらとする各器官であることを教えられます。

万物の終り

今日の社会は「混沌・混乱」という言葉がふさわしく、先のことを予測するのは非常に難しい時代です。

(世の終わりには)・・・戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょう・・・民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります・・・多くの人たちの愛は冷たくなります。

(マタイ 24:6、7、12)

二度の世界大戦を経て、同じ過ちを繰り返すことのないようにと文化、民族、宗教等の枠を超えるべく

ます。

国際連合という枠組みを作り、互いに話し合うことのできる場を設けました。ヨーロッパの国々はEUという共同体を作り、経済的なつながりを強化し、理想的な社会を目指しました。人々は、あらゆる結びつきを強固にすることにより、世界平和の実現を目指しました。

しかし現実の世界は、まったく逆の方向へと向かっています。人種・民族間、宗教、そして経済的な対立は深まるばかり。自国の利益を優先することによる紛争は絶えることなく、テロの恐怖は世界に蔓延しています。核の脅威は拡散し、環境破壊もとどまることなく進んでいます。愛は冷え、憎しみが増大し、互いに信じ合えない社会を形成しつつあります。とても理解できないような事件が日常的に起こる社会へと変貌を遂げています。また情報は、あらゆるものがインターネットで結びつき、コンピューター・AI(人工知能)の進化はスピードを上げて、増殖し続けてい

一つのからだ

見よ。その日が来る・・・その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのではない。実に、主のことばを聞くことのききんである。

(アモス 8:11)

人々は幸せを、真理を探し求めています。しかし、本当の幸せ、真理をどこにも見つけることができません。創造者なる神から提供されている聖書だけが、唯一、本当のまったく変わることはない真理です。現代の多くの人々は「聖書は時代遅れの書物であり、イエスキリストは死んだ。神はいない」と言います。

あなたがたは言う。「神に仕えるのはむなしなことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩

いても、何の益になろう。今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行なっても榮え、神を試みても罰を免れる。」と。
(マラキ 3・14～15)

あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。

(マラキ 3・18)

見よ。その日が来る。

(マラキ 4・1)

聖書のことば通り、私たちは今、まさに終りの時代に生かされています。主を信じる者としてどのようにあるべき、またどのように生きるべきなのでしょうか？

万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互い

ないからです。

(ヨハネ 15・5)

いつもかしらなる主につながり、それぞれが各器官としてふさわしく働くことができれば、私たちにあってこれ以上の幸せはありません。

キリストによって、からだ全体は、二つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

(エペソ 4・16)

私たちは主によって捜し出され、導かれて主を信じる者とされました。そして今、集会に連なる者とされています。試練を通して主のみわざを共に体験し、信仰を強められ、より結びつきを強固なものとし、主をほめ讃える者、主を畏れる者へと変えられて

に熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。つばやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。

(1ペテロ 4・7～10)

主に祈る時、私たちは自らの罪を示されます。同時にその罪を贖ってくださった主の大きな、深い愛を覚えさせられます。そして私たちは初めて互いに愛し合うこと、仕えることができる者へと変えられます。主を離れては私たちは何もすることができません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができ

いきます。

もし、私たちの集会において共に喜ぶことができなかった、その集まりは主のおられない単なる集まりであり、もしかしたら裁き合う集まりになっているかもしれません。

見よ。兄弟(姉妹)たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんと楽しいさであろう。

(詩篇 133・1)

主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

(詩篇 133・3)

主が共におられる集まり・集会は、私たちにとって最上の、そして最高の幸せ、を感じることでできる場所であり時間です。それは主がそこに「とこしえのいのちの祝福」を命じてくださったからです。主だけを

見上げ、心から主をほめ讃えるとき、私たちは真の兄弟姉妹になることができます。そして主をかしらとする一つのからだとなり、何をもつてしても決して得ることのできない喜びに身体中が包まれます。

この地上に生かされている限り、主にある兄弟姉妹の交わりから離れることなく、主から与えられている「とこしえのいのちの祝福」を共に味わい、主の栄光を求めながら歩んでいきたいと願っています。

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。
(黙示録 22・20)

会沢道広(福岡キリスト集会)



ゆずりの地への約束

吉田 浩

聖書は神のみことばです。その中心は神の子であるイエス様です。イエス様とはどういうお方でしょうか。イエス様は真の「断罪宣言」をなさるお方であります。しかし、それ以上に「自由宣言」を出すことができます唯一のお方です。先ず「断罪宣言」から見えてきたいと思います。マルコの福音書7章1節から23節に書かれています。

その場面は、洗わない手でパンを食べているイエスの弟子がいたのを見て、神の律法を厳格に守るユダヤ教徒がそのことを問題にしたところで、それに対してイエス様が群衆と弟子たちに答えられたことばです。マルコの手紙7章15節、そして20節から23節です。

外側から人にはいつて、人を汚すことのできる物は
何もありません。
(マルコ 7・15)

人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。

(マルコ 7・20-23)

「孟母三遷」ということばがありますが、孟子のお母さんが子どもを立派に育てたいので、環境を整え

ようと、三度も住まいを変えたという話です。しかし、イエス様は人間の心の内側に汚れたものがあり、それが人を滅ぼすものであり、外側の環境が人の善し悪しを決めるものでないと、人の内側にある罪の現実を認めるようにと「断罪」されたのです。

イエス様はまたヨハネの福音書で次のように言っておられます。

イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるものではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子あなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」(ヨハネ 8・34～36)

このみことばの34節「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」

あなたがたはほんとうに自由なのです。

(ヨハネ 8・36)

いったい、イエス様は、どのようにして私たちを罪の縄目から自由にくださるのでしょうか。

それは、ただひとえに、自分ではどうすることもできない人間の罪を、イエス様が父なる神様の前で身代わりとして全部背負われたということです。そのため、に神様であられるイエス様が人の姿をお取りになりました。パウロは次のように書いています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。(ピリピ 2・6～7)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とさ

ゆずりの地への約束

は「断罪宣言」です。そして人間の罪の実態が指摘されています。それは内側の人間の心の状態は「奴隷状態」にあるという現実の指摘です。パウロはローマ人への手紙の中で次のように言いました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。

(ローマ 7・15)

これぞ悩める人間による「罪の奴隷状態」の正直な告白ではないでしょうか。しかし、イエス様はこの「断罪宣言」にまさる「自由宣言」をなさっているのです。それは先ほどのヨハネの福音書8章にある次のことです。

もし子(イエス様)があなたがたを自由にするなら、

れました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。(2コリント 5・21)

「神」とは父なる神様です。「罪を知らない方」とは御子イエス様です。イエス様が十字架にかかれたのは、人間の手によるだけでなく、神様が人間の罪を赦すために、罪なきイエス様を死なされた事件です。一度限りの事件です。ヘブル書には次のように書かれています。

キリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

(ヘブル 9・26～28)

私たちはこのようなイエス様、「断罪宣言」をなさ
るだけでなく父なる神様の前で有効な「自由宣言」
をなさるイエス様を果たして本当に知っているでし
うか。いや、体験しているでしょうか。

イエス様の願いは一人ひとりから離れて、神の
子とされることです。それはアダムが罪を犯して以
来、一貫した主なる神様の、罪人である全人類に対す
る愛のメッセージです。

イエス様がこの世に來られる六百年ほど前、イスラ
エルには預言者エレミヤがいましたが、神様はすで
にこのメッセージを託しておられました。

背信の子らよ。帰れ。わたしがあなたがたの背信
をいやそう。
(エレミヤ 3・22)

「背信」とは、いったいどのようなことを言うので
しょうか。それは神様が愛を示していただくさるの

に、それを無視して我が道を歩むことです。エレミヤ
書はさらに主の御心を伝えています。

わたしはどのようにして、あなたを息子たちの中
に入れ、あなたに、慕わしい地、諸国のうちで最も麗
しいゆずりの地を授けようかと思っていた。

(エレミヤ 3・19)

このみことばは冒頭に引用したイエス様の御心と
まったく同じものです。その箇所をもう一度お示し
します。

奴隷はいつまでも家にいるものではありません。しか
し、息子はいつまでもいます。
(ヨハネ 8・35)

確かに、罪の奴隷である限り、神様からさばきを
受け、滅ぼされます。しかし、神の子は自由にされ永

遠のいのちを得るのです。その条件は、ひとえにイエ
ス様を信じ受け入れることです。次のみことば
の通りです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世
を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅
びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者
によってあかしされて、神の義が示されました。すな
わち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義で
あつて、それはすべての信じる人に与えられ、何の差
別もありません。
(ローマ 3・21～22)

いかがでしょうか。あなたは神様に敵対して相変
わらず罪の奴隷として過ごされますか。それとも神

ゆずりの地への約束

の子として、いつまでも神の家にとどまり続けること
を願われるでしょうか。
主の祝福はいつの時代でも悔い改めから始まりま
す。有名な放蕩息子のたとえを通してイエス様は私
たちに悔い改めの実際を示してくださいます。

おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの
前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれ
る資格はありません。雇い人のひとりにしてください。

(ルカ 15・18～19)

この「悔い改め」がいかに徹底的であるかは、彼が
主なる神、父なる神様のもとに立ち返ることだけを
願い、子になることを願わず、雇い人の一人として、つ
まり自らを奴隷状態に突き落としたままでもいいと
考えていたことにあるのではないのでしょうか。これこ
そ神のみこころに添った悲しみのあらわれでありま

す。次のみことばの通りです。

神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらしめます。
(2コリント 7・10)

目先の損得勘定で行動するのではなく、もう主を裏切るまいと必死に主なる神様のもとに帰ろうとすること、そのことを主は喜んでくださいます。そのままの状態、ありのままの罪汚れた状態で主のところに馳せ参ずるだけでいいのです。ルカの福音書では、放蕩息子は次のように歓迎されたとイエス様がおっしゃっています。

ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。』

「主は生きておられる。」と誓うなら、国々は主によって互いに祝福し合い、主によって誇り合う。

(エレミヤ 4・1～2)

私たちの世界は色々な問題を抱えています。家庭の中にも問題を抱えています。集会の中にも問題を抱えています。しかし「主は生きておられる」と誓うなら、国々は、家族は、集会は、主によって互いに祝福し合い、主によって誇り合う、と書いています。これはゆずりの地の特徴であり、あの放蕩息子が味わったゆずりの地の祝福ではないでしょうか。私たちもまた、エレミヤ書3章22節の前半の「背信の子らよ。帰れ。わたしがあなたがたの背信をいやそう。」という主の呼びかけに答えて、「今、私たちはあなたのもとにまいります。あなたこそ、私たちの神、主だからです。」(エレミヤ3・22後半)と、告白しようではありませんか。

主を信じ愛する者はそれぞれ、「あなたこそ、私た

ゆずりの地への約束

そして肥えた子牛を引いて来てはふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。
(ルカ 15・22～24)

放蕩息子が、ゆずりの地に招き入れられる喜びの表現です。エレミヤ書はどのように描いているでしょうか。そこにはこの小冊子の題名でもある「主は生きておられる」ということばが出てきます。聖書全体にこのみことばは六十回ほど引用されています。その中でもエレミヤ書には九回も引用されています。そのうちの一つですが、4章1節から2節です。

イスラエルよ。もし帰るのなら、——主の御告げ。——わたしのところに帰って来い。もし、あなたが忌むべき物をわたしの前から除くなら、あなたは迷うことはない。あなたが真実と公義と正義とによって

ちの神、主だからです。」と、一人だけでなく、集まりを通して告白できるのです。エペソ人への手紙に、イエス・キリストのからだとしての教会には、ゆずりの地に入る祝福が次のように書いてあります。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

(エペソ 5・25～27)

これがゆずりの地の教会の姿であります。まさしくローマ人への手紙8章に描かれている主イエスを長子とする教会の姿ではないでしょうか。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。
(ローマ 8・28〜29)

イエス様は、十字架におかかりになる前、あなたがたをしもべとは呼びません、友と呼びます、と言われたことがあります。けれども、よみがえられたあと、私たちをどう呼ばれたでしょうか。ヨハネの福音書で、七つの悪霊を追いついていただいたマグダラのマリヤにイエス様は次のように語られました。

イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上つてい

ないからです。わたしの兄弟たちのところに行つて、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」
(ヨハネ 20・17)

イエス様は私たちの罪の代価を払うために十字架にかかられました。けれどもよみがえられました。よみがえったイエス様は私たち一人ひとりを「友」と呼ぶ以上に、ご自分を「長子」として私たち一人ひとりを「兄弟」と呼んでくださるのです。私たちは御子の姿に似た者となる。そのことがここでイエス様の口を通してはつきりと言われているのです。

終わりに、エレミヤ書の32章を、少しご紹介したいと思います。この章は非常に不思議な章です。そこには、神様がいかに生きていらっしゃるお方かが、如実に示されているからです。

見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあるうか。

(エレミヤ 32・27)

この32章はまさしく主の裁きによって廃墟となる土地、そのアナトテの畑の売買契約が同じ主なる神様によって命令され、そのとおりエレミヤが代金を払い契約を結ぶところです。そんなことがあり得るか。とエレミヤは一言も言いませんでした。エレミヤの祈りはどういう祈りでしたでしょうか。エレミヤ32章17節以下25節までに記されていますが、その冒頭は次の祈りで始まっています。

ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。

(エレミヤ 32・17)

ゆずりの地への約束

これはまた何という主のおことばに即応した祈りでしょうか。寸分違わない主の宣告と同じ祈りです。そして、廃墟となるアナトテの地はまさしくゆずりの地としてイスラエル人が捕囚から帰還するその象徴ともなるのです。そして、イスラエル人に対する以下の預言は、先ほど来、述べてきました私たち異邦人にも及ぶ、イエス様による全人類の罪の贖いが完成されることも預言しているのです。エレミヤ書には、さらに次のように書いてあります。

見よ。わたしは、わたしの怒りと、憤りと、激怒とをもって散らしたすべての国々から彼らを集め、この所に帰らせ、安らかに住まわせる。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。

わたしは、いつもわたしを恐れさせるため、彼らと彼らの後の子らの幸福のために、彼らに一つの心と一つの道を与え、わたしが彼らから離れず、彼らを幸福に

するため、彼らとどこしえの契約を結ぶ。わたしは、彼らがわたしから去らないようにわたしに対する恐れを彼らの心に与える。

わたしは彼らを幸福にして、彼らをわたしの喜びとし、真実をもつて、心を尽くし思いを尽くして、彼らをこの国に植えよう。(エレミヤ 32・37～41)

これが私たちにまで及ぶ福音の光そのものであります。これぞ「主が生きておられる」証しであります。

そして私たちは新約聖書を通して、「主が生きておられる」証しのことばをさらに確かなものとして、次々と知らされているのです。

確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあつて弱い者ですが、あなたがたに対する神の力

のゆえに、キリストとともに生きているのです。

(2コリント 13・4)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつて生きているのです。

(ガラテヤ 2・20)

エレミヤ書では「主は生きておられる」とは誓いのことばでした。しかし、私たちは主イエス様が十字架上で死なれただけでなく、三日後によりみがえられて、今も「生きておられる」ことを信仰によつて確信させていただいているのです。それだけでなく、そのイエス様が私のうちに「生きておられる」と互いに証しあえるのです。

さらに、私たちはこのゆずりの地は、主イエス様が再び天より来られ、私たちを迎えに来てくださることにより完成されることを教えられているのです。ヨハネの黙示録にこう書かれています。

見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。

(黙示録 22・12～13)

結局、主イエス様のみわざとは、罪人である私たちにゆずりの地、すなわちイエス様にある永遠のいのちを与えることにあつたことを私たちは知らされるのです。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜

ゆずりの地への約束

物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。(ローマ 6・23)

吉田浩(春日部キリスト集会)



主よ、あなたが、 全権を握っておられます

福留 伸子



左から義理の姉の恵子さん、伸子さん、姪の伊藤一恵さんとそのご主人の伊藤良平さん

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、…すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。

(エペソ 1・20、21)

十年前、本誌10号に書かせていただいた証しのタイトルは「主に明け渡してから」というものでした。今回は、最近、私の身に起こったことを通して主に教えられたことを題名にしました。

二〇二五年十月三十日金曜日未明、私の中学時代の友人、Mさんが亡くなりました。六十五歳、独身、ビルから飛び降りて自ら命を絶てしまったのです。

この出来事が私の信仰に与えた影響から証ししようと思います。Mさんはイエス様のことをまるで知らない訳ではありませんでした。集会には集っていませんでしたが、以前、私のいた熊本教会まで訪ねてきてくれ

主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたがご存じです。」 (エゼキエル 37・3)

自死したという知らせを受けてから三ヶ月間、私は灰色の世界に突き落とされて、同じ問いがグルグルと頭の中を巡っていました。「どうして?なぜ?」、「神様はなぜ何もしてくれなかったの?」、「愛のない私!」と立ち往生してしまいました。事実がにわかには信じがたく、二ヶ月間涙も出ませんでした。ある日、ようやく神様に「ごめんなさい」と叫びながら慟哭(どうこく)していました。すると「もう、お前が心配しなくてもいいんだよ。わたし自身がMを慰めているのだから」と主が語ってくださいました。生き辛さの極(きわ)みに達したMさんに対して、彼女のことを誰よりも深く愛しご存知であられる主が、最終的に許されたことなのだとようやく受け取れました。

たり、ベック兄と三十年近く前にお交わりしたこともあり、折に触れ、集会に誘ったりみことばを送ったりしていましたが、私の手紙が原因で二〇二三年の初めに、一方的に交わりを断たれてしまいました。再び彼女から電話をもらったときには、パニック障害が再発しており、うつ状態で「死にたい」と苦しんでいました。一時的な心の病だろうと思って私はイエス様に祈ることを勧めたり、みことばを書いた葉書を数ヶ月にわたって送りました。返信はなくとも「読んでいるから…」という電話が励みになり送り返っていました。このとき私の心の中には、あまり人間的に近づきすぎるとかえって彼女の心が主に向かないのではないか、という気持ちがありました。確かに今は「死にたい」と言っているけれど、それは彼女が主のところへ来るための一時的な苦しみだと思っていました。いつかはきつと、みことばに目が開かれて主を賛美できるようになるに違いない、と思っていました。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのつばはどこにあるのか。」

死のつばは罪であり、罪の力は律法です。

しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

(1コリント 15:55-57)

それでもなお、しばしば自責の念、主への不信感が襲ってくるがありました。そこから完全に脱け出せたのは、「主が全権を握っておられる」ということばを聞いてからでした。人間がどうして自分から死を選び、実行して達成されてしまうのか、それは私には分かりません。彼女を止める手立てを講じることができなかった自分を責める思いもありました。けれど、主が全権を握っておられ、それを許されたのだから、今はただ受け留めようと思いました。そのことばの意味が日増しにはつきりしてきて、毎朝目が覚めると「主が全権を持つ

ておられます。私はゼロです」と祈るようになりました。そこから一日をスタートすると、心にこだわりがなくなり自由になり、喜びが湧いてきます。

成長させてくださる主

主はまことにみことば通りのお方であり、みことばを成し遂げられるお方です。またみことばは人の心の奥底を明らかにして、主に立ち返らせる力があります。

私は、主に出会うまでは人生に対してとても反抗的な気持ちで生きていました。あるときは捨て鉢で、刹那(せつな)主義になり、気ままな行動を取っていました。また正義を唱えて、熊本県の水俣病患者さんたちの支援者としてチッソ本社前に座り込んだり、現地に住みこみ、ときには熊本県庁までバス二台で押しかけて認定業務の遅れに抗議したりしました。しかし私の抱えた虚しさは解決されませんでした。自分勝手な欲望と虚無とご都合主義の正義に振り回され、くたくたになつて、

ようやく熊本市にある叔父の教会に転がり込んだときは、もうずがるところはこしかなという思いでした。

人生を新しく出直すためには本当の神様のことを知らなければならぬ、と思ったとき、主が道を備えてくださり韓国の神学大学に入学が許可されました。當時は、第二のエルサレムと言われるほど韓国には教会が多く、信仰の火が燃えていました。主に対して自分自身がいかにか反抗的で傲(ごう)慢であるか、自分の罪に何度も胸を衝(つ)かれたのはこの時代でした。

韓国の大学院を卒業して日本へ戻ってくるなり、母親が大腸癌で召されてしまいました。手術からわずか三ヶ月後、心の準備もできないまま最愛の母を失ったのです。母は受洗してはいましたが、私同様中途半端な信仰しかなく、悲しい死でした。神学大学で知識を得てはいても、私には天国の確信はありませんでした。心の中は真つ暗闇で、世の中にこれほどの悲しみがあるのなら、私は決して生まれてこないほうがよかったと思

ました。次のみことばは私の思いそのものでした。

ああ、私の頭が水であつたなら、私の目が涙の泉であつたなら、私は昼も夜も、私の娘、私の民の殺された者のために泣こうものを。(エレミヤ 9:1)

主の救いを黙って待つのは良い。…ひとり黙ってすわっているがよい。口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。(哀歌 3:26、28-29)

絶望の中でした。徹夜で祈り、断食もし、声が枯れるほど主の名を叫び、目につく聖書の箇所は癒しの記事ばかりだったのに、最愛の母は結局手術してわずか三ヶ月でなくなりました。訃報を熊本の牧師館で聞いた私は、その場に泣き崩れてしまいました。みことばも、祈りも、何も信じられなくなり、私も死んだと同様になっていました。それでも教会で伝道師として働かな

ればならず、何の喜びもないまま体だけは動かしてしました。そして腰を痛め、数ヶ月の入院が逃げ場として与えられたときはホッとしていました。腰に重りをぶら下げ、二日中ベッドに横になったままの生活の中で、自分が信仰をなくしていることに気づかされたのは次のみことばによつてでした。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならぬのです。(ヘブル 11・6)

また、私がそれまで信仰だと思っていたものが、実は自分中心のご利益信仰だったことに気づかせてくれたのも、みことばでした。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、…羊は

囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。

(ハバクク 3・17、18)

そこから吉祥寺集会に導かれるために、主はある兄弟を遣(つか)わしてくださり、私が熊本の教会を去るように、事を起こされました。お世話になった方々をある意味、裏切つて出て行くことになりましたが、みことばが背中を押してくれました。

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなごを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。(マタイ 10・28)

死に至るまで忠実でありなさい。(黙示録 2・10)

主にもう一度立ち返るために、私は自分がどれだけ醜(みにく)い人間かを、知らなければなりませんでした。大きな罪を犯してしまつたあと、みことばが常に私を追いかけてきました。

人を欺く情欲によつて滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもつて神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきこと…

(エペソ 4・22、24)

主を信じた後も、主に反抗し罪を犯し、主に喜ばれないことを平然とやつてのける自分。頭を下げるのが嫌で、「憐れんでください」と膝を屈するくらいなら、「地獄に落ちてやる!」と思った私。神学校で学んだくせに、一番基本的なイエス様との関係ができていない。罪を罪と思えない。本当に目の見えない自分。

すべての行状を書き出せば誰も私をクリスチャンとは呼ばないだろうと思いました。ただ、希望は、新しく創造してくださる神様でした。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(2コリント 3・18)

あなたがたは、古い人をその行ないといつしよに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のうちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。(コロサイ 3・9、10)

このみことばは真実です。カナダでの実話ですが、ダニエル・マン(二八七〇年没)という死刑囚が刑を執行される前の三週間という短い間に、聖書の真理を呑み込み急激

に変えられてきました。死ぬ四日前には「不思議なことが分かった……キリストご自身が私の義だ……そうだ、キリストご自身だ。彼の成し給うたことじゃない、彼ご自身……今日、神の右に坐しておられるキリスト……このお方が私の義だ」とその喜びようは非常なもので、伝道者に話しかけられると「『もうたくさんです。こういうことを、人間が知ることができるものだと思わなかったのです。しばらく静かに味わわせてください』と押しとどめた」というくだりがあります。もうすぐ断頭台の露に消えるという死刑囚さえ神様は成長させてくださり、このような至高の喜びをお与えになれるのです。

（「神の恩恵とダニエル・マン」P・Jロイジー著）

人生には困ったことが時々やってきます。暗礁に乗り上げてしまつて動きがとれない、先が真つ暗にしか見えない時があります。でも今はそんな苦しみも主を相談相手として耐え抜いていけば、必ず新しくされた自分を発見できる、大丈夫だと思えます。主が成長させて

くださるのだと思います。ヨナが大魚の腹の中で「死」を過ごしたように、苦しみの中で私の中の何かが「死ぬ」のだと思います。そして、造り変えられていくのだと。

キリストにあつて天と地を二つにされる神

私は新聞記者だった父と小学校教師経験のある母との間に生まれ、兄、姉、末っ子の私という家族の中で特に不自由な思いをしたこともあまりなく、恵まれて成長しました。名前の通り伸び伸びと育てられ、言いたいことを口にし、やりたいことをやり、頑固で甘えん坊の、好奇心の強い子供でした。物事を考え始めるようになってからずっと、いつになつても自分の中で答えを得られない問いがありました。それは、なぜ人は死ぬのか、裏を返せばなぜ人は死があるのに生まれてきたのか。要するに私はなんのために生まれてきたのか、生きる意味が分からなかったのです。今は、はっきりと分かります。神様だけがその答えをくださいました。次のみことばに

出会ったとき「これだ」と思いました。

（神は）みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになつたご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて二つに集められることなのです。（エペソ 1:9-10）

これは、私が聖書を読み始めてから今も内にとどまっているみことばです。自分がこの世に存在している意味はここにあると思ひました。それから、世界がなぜあるのかという理由、目的もここにあると思ひました。みことばは不思議です。歳を重ねて、種々の経験をしていくほどに、やっぱり聖書の言っていることは「本当だ」、「まさしく真理だ」と思わされてきます。これからもうだと信じています。

最後に、姪の結婚のことを少しだけ書かせていただきます。お相手は職場の方ですが、実は私たちは天から降つてきた人だと思つています。出会ったときはまだイエス様を信じておられませんでした。主の憐れみですぐにイエス様を信じ受け入れることができました。なぜそんなに素直に信じられたのか、また姪の弱さも忍耐してくれる真面目な彼に驚いています。「神のなさることは、すべて時にかなつて美しい。」（伝道者 3:11）、これが二人の選んだみことばです。

本当に私たちが、いつも神様の栄光をほめたたえる者となれますように。

福留伸子

福岡県小倉市（現北九州市）生まれ。泉台小、東久留米中、武蔵丘高、明治学院大学、韓国神学大学院卒業。現在、麗澤大学非常勤講師（日本語教育）

小さな私のなまえを 呼んでくださったイエス様

飯島 弘雄



妻の典子さんと

私は、一九四五年、東京都板橋区で生まれました。家の中には箏箏(たんす)の上に小さな仏壇があり、その上に天井から吊るした神棚がありました。両親は何かを信じていたわけではなく、ただ習慣として置いていたようです。私自身もそれが当たり前のことだと思っていました。四十八歳で救われましたが、それまでは聖書のこととはまったく知らずに、無神論者として生活していました。

職業は、幾つかの専門学校や大学の教育学部、音楽科などでピアノ演奏の実技指導の講師をしてきました。また、全日本ピアノ指導者協会(通称ピティナ)という社団法人の主催するピアノコンクールの審査員の仕事などもさせてもらっています。しかし、私自身はピアノを上手く演奏できるわけではありません。また、仕事仲間の多くは、それなりの業績、実績を持っているのですが、私はそのようなものは何も持っていないので、肩身の狭い思いをしてきました。しかし

そのような環境の中で証(あかし)をするようにと、イエス様があえてその場に置いてくださったものと思っています。

あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。(詩篇 139・16)

小学生のときから音楽が好きでしたが、当時はそう簡単にはピアノやオルガンに触れることなどとてもできない環境でしたので、おもちゃのハーモニカを吹くのが唯一の楽しみでした。中学三年生になってようやくアップライトピアノを買って貰うことができました。なんとか音楽大学のピアノ科に入学しましたが、あとが大変でした。周囲の学生は幼少の頃からピアノに親しんできた人が多く、皆レベルの高い演奏能力を持っているように見えたので、付け焼き刃のような勉強で入った私は大きなプレッシャーを感じました。

音楽大学では、大学院に進級して勉強を続けたいと思いましたが、それはできませんでした。当時音楽大学では、大学院は設置されたばかりで進級者も少なく、希望すれば実技担当教官がそのための勉強の仕方など、表に裏に協力してくれる場合が多かったのですが、私の担当教官は指導者というよりも芸術家タイプで、大学院の存在そのものを評価しない人でした。相談にいった時も「大学院なんて何になるんだ、この世界は実力がすべてだ」と言われ、まったく取り合ってくれません。とても残念でしたが、卒業後は一年くらい浪人しながら勉強して、それから将来のことを考えようと、思い直しました。

ところが一九六九年三月に卒業して、四月の初めに、音楽専門学校の事務員をしている知人から、ピアノ講師が足りないのです、もし就職が決まっていなかったら至急面接にきませんか、との電話がありました。すぐに学園長との面接にいき、その場で週四日ピ

ノ科講師として勤務することが決まりました。

これには私自身驚きました。いくらなんでも、そう簡単に音楽専門学校の講師になれるなんて思ってもいませんでした。後日に同級生と会うと「飯島君、すごい所に勤めているんだね」と言われ、実力と立場のギャップを見透かされている気がしました。その後も一九七六年までに数か所の短大や大学の講師を兼ねることになりました。結局、自分のやりたかった勉強は大してやらなくなり、そのかわり身の程をわきまえない、高慢な人間になってしまいました。

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思つたことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

(ガラテヤ 6:3-4)

一九七八年に結婚して妻と二人の子供の四人家族で一応は平穏な生活をしてきました。仕事の都合で千葉県流山市に住んでいましたが、一九九二年に私の両親の住む埼玉県川越市に引っ越しました。しかし川越に来てから私の母が脳梗塞で倒れて妻の負担が重くなってきました。そして妻は伊那集會に集う姉に導かれてキリスト集會の川越礼拝に足を運ぶようになりました。

妻は、日曜日午前中に出かけて昼過ぎに帰ってくるという生活が続きましたが、何をしているのかというとき、聖書を読んでお祈りをしているということでした。そしてキリスト教という宗教ではないということの特に強調していました。初めのころは多少いぶかしく思いましたが、本人の心の支えになるのならやむを得ない、と思い反対はしませんでした。そして自分にはかわりのないことと思っていました。

しかしあるとき、何気なく聞いた集會のメッセージ

テープに心が大きく揺るがされました。仕事を終えて、千葉県松戸市から車で川越に帰る途中でした。普段は、神経が疲れる気がして、車に乗っているときはラジオをかけたがり、テープを聴いたりということは殆どしなかったのですが、その時はどういわけか身体全体の疲れを感じ、これから家まで二時間も運転するのは退屈だなーと思いながら、ふとコンソールボックスを見ると集會のメッセージテープと思われるものがありました。どうせつまらない話だろうと思いがらも、退屈しのぎにそのカセットテープをかけてみました。しかし聴いていくうちに次第に引き込まれていきました。話している方の誠実な語り口は信頼できそうな人柄を感じました、そしていままでの常識では考えられないような内容でした。…何か問題があるとき「神様、このことをこのようにしてください、他のことは自分でできますが、この問題だけは自分ではできませんから、どうかよろしくお願いし

ます」というような祈りに対して神様は「それはできません、そのような祈りをきくことは不可能です」と言われるとのことでした。そうではなくて「自分のすべてを神様に任せます、全部神様の良いようにしてください」という態度で祈るとき、神様は祈りをきいてくださり良いように働いてくださる…ということでした。これには驚きました、自分のすべてを神様に預けてしまいなさいということでした。はじめは耳を疑いました。聞き間違えたのではないかと何回もテープを戻して聴きなおしました。そのようなことは聞いたこともなく、考えたこともありません。一般的な常識とはまったく別の世界の世界のようでした。

それから幾つものメッセージテープを聴きました、どれも違った内容ではあっても何かどこかで通じるものがあるように感じました。次第に集會の考え方に興味を持つようになってきました。

しばらくしてから、川越で家庭集會があるという

ので思い切って行ってみました。夜の集会のあと、二人の方と三人でベックさんとお話することができました。私は後回しにされましたが、前のお二人は実に大きな問題を抱えておられました、こんなに大変な目にあっている人が目の前に二人もいるということが信じられない思いでした。ベックさんはそれぞれにとっても丁寧に対応されていて、普通の博識な外人さんとは何か違う雰囲気を感じました。この方は本当に神様と応答できるのではないだろうかと思いました。私の番になりました。前のお二人のように大問題を抱えていたわけではないのですが、当時の私は非常に高慢になっていた、仕事や生活などすべての面に満足せず、より多くの外面的な豊かさを求めていました。いま思えばとても恥ずかしいことですが、そのような不平不満を話してしまいました。「こういうことをすれば、こういう態度をとれば、良い事があるよ」と、たとえ気休めでも何か言って貰えるかと期待しました。

たが、ベックさんの返事は私に同情してくれるものではありませんでした。「でもね、世の中にはあなたのことを羨（うらや）ましく思っている人もいるのですよ」と答えられました。この言葉は重く心に響き深く考えさせられました。

それから幾つかの家庭集会や日曜礼拝に行くようになり、この集会には生きたまことの神様がいるのではないかと感じてきました。

しかし聖書を読み始めたらさっぱり分かりません。ある方は、初めて読むのにはヨハネの福音書とか詩篇が読みやすいですよ、と言われましたので両方読みましたが、どちらも意味がまったく分かりませんでした。それだったら最初から読もうと思いい創世記を開きましたがとても信じられないことばかりです。だいたい蛇と人間が言葉を交わすということ事態がありえないことではないかと思ひながらも、ともかく聖書の最後まで読み通してみようと、半ば義務感で

文字だけは読切りましたが、中身はさっぱり分かりませんでした。しかしそれはあとで大いに益となりました。

その後しばらくしてから、それまで以上に考えさせられるメッセージテープを聴きました。自分が大切にしていく物事を捨てなければならぬことがある、という内容でした。自分にはとても大切になっているものがありました。スキーです。といっても競技スキーではなくゲレンデで軽くすべる程度のもですが、約三十年間続けてきた、唯一の趣味と言えるものでした。スキーを止めることにしました。一九九四年の秋口でした。

そうしたら徐々に自分にとっては不思議なことが起こってきました。聖書のみことばがほんの少しですが、身近なものになってきました。イエス様の十字架の意味するものも感じ取れるような気がしてきました。神様の前に自分がいかに小さく、ちり灰のよ

うなものでしかなく、欠陥だらけの人間であるかということが分かってきました。日々の悔い改め、感謝・賛美がどれだけ希望と元気を頂けるものかということを実感するようになりました。礼拝でもお祈りをさせてもらうようになりました。周囲の兄弟から「最近変わってきましたね」と言われることもありました。そして一九九五年の八月の終わり頃に、九月からメッセージを担当するように、という連絡を受けてびっくりしました。周囲の兄弟姉妹方はもつと驚かれました。信仰の先輩方の前に出ることなど気まぐずくてとてもできることではないのですが、主から来たことであるというので、ただ祈ることしかできませんでした。

それから二十年以上経ちました。ピアノの指導を通してイエス様を証ししなければならぬ立場に置かれていると思っています。

聖書によれば、音楽とは神様を賛美するもの、神

の前に喜び歌うものとあります。

女たちはイスラエルのすべての町々から出て来て、タンバリン、喜びの歌、三弦の琴をもつて、歌い、喜び踊りながら、サウル王を迎えた。
(1サムエル 18・6)

ダビデは、主の前で、力の限り踊った。

(2サムエル 6・14)

詩篇の多くの章には、「指揮者のために」「弦楽器にあわせて」「ダビデの賛歌」とか、「フルートにあわせて」「立琴にあわせて」などのサブタイトルが小さく書かれています。

また、人の心を清くして元氣を与えるもの、とも記されています。

神からの悪い霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴

を手に取って、ひき、サウルは元氣を回復して、良くなり、悪い霊は彼から離れた。
(1サムエル 16・23)

しかし、音楽はサタンに悪用されることもありま

す。
そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。
(1列王記 18・26)

彼らはますます大きな声で呼びわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。
(1列王記 18・28)

音楽は、度を過ぎた自己主張、自己実現の場

も成りうるものです。また、神様が与えてくださった

音楽なのか、サタンからの惑わしによる音の響きなのか、判断が難しい場合があります。

私自身は小さい者で、ちり灰に過ぎませんが、かわりを持った学生さんやピアノを学ぶ人に、「ピアノという楽器は自己主張・自己実現の道具ではなく、心が清められるもの、慰められるもの、元氣を貰うもので、それは神様からの贈り物である」という認識を持って貰えるように指導しなければならぬもの、と思っています。

学校関係の仕事は二〇一六年で終わりになりますが、ピアノ指導者協会の仕事は、まだしばらく続けられそうです。せめて天国でイエス様に、ルカ17章10節に記されているように「役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」と言えたら最高の幸せと考え、祈っていきたいと思っています。

飯島弘雄(いじま ひろお)

一九四五年 東京都板橋区生まれ

東京都立豊島高等学校卒業、

武蔵野音楽大学ピアノ科卒業

尚美高等音楽学園、竹早教員養成所、

十文字学園短期大学、講師を経て、

聖徳大学を二〇二年まで、文教大学を二〇一六年まで

講師を務める。

全日本ピアノ指導者協会正会員、コンクール審査員、

プロシード・ピアノグレード 顧問

家族 妻 典子(のりこ)

長男 弘昭(ひろあき)

長女 ひかり(ひかり)

長女の夫 坂本昌宏(さかもと まさひろ)

孫 晴志郎(せいしろう)、真之亮(しんのすけ)

主イエス・キリストの 限らない恵み

杉本文雄



聖書は
こう言う
主は
信頼す
者は
失望
させられ
ることが
ない

妻の淳子さんと

私は一九五六年十一月三日に大阪府八尾市で生まれました。三人兄弟の末っ子で、かなりの甘えん坊だったようです。鉄道員の父と母、姉と兄、それに祖母の六人家族でした。小学校までは厳(きび)しく育てられ、中学校からは自主性を大切にして育ててもらったように思います。小学校の時はワンパクで先生を困らせていたようです。そんなワンパク坊主も順調に成長し、高校生になりラグビー部に入学しました。体はちっちゃいし、運動をしてなかった自分がなぜラグビー部に勧誘されたのかは謎です。苦しい練習や地獄の夏合宿などを通して生涯の友人ができました。

三年生でキャプテンをしていた時の夏合宿で、大きな出来事が起こりました。二年生の部員が練習後、急死したのです。つい先ほどまで一緒に走っていた後輩が今はもう一緒に走ることも話すことも笑うことも何もできない。死とはなんと無情なことだろうか、そしてキャプテンという責任ある立場でありながら

何もできない無力さで、合宿所での夜を呆然(ぼうぜん)

(ん)としながらまんじりともせずには過ごしました。この出来事は人間の儚(はかな)さと無力さを心の奥底へ植えつけた経験だったと思います。

人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。

(哀歌 3・27〜29)

大学でもラグビーを続け、やはりここでも生涯の友人ができました。大学ではラグビーだけでなくスキーにも熱中し、まさに青春を謳歌(おうか)していました。妻と出会ったのは大学生の時でした。一九八〇年に就職したのちの一九八二年十一月に結婚しました。総合商社に就職した私はモーレッツ社員で、結婚しても毎晩の帰宅は真夜中、子供が生まれてもそ

れは変わらず、妻には大変苦勞をかけました。最初の子供、長女が一歳半だった一九八五年に初めての海外駐在に行きました。駐在中は日本にいる時に比べれば時間に余裕があります。親子三人で楽しい時を過ごしました。仕事も順調でした。この世での楽しみがすべてと思っていました。

一九九二年に二度目の海外駐在で南アフリカのヨハネスブルグに赴任しました。妻は、到着してすぐにアキレス腱を切ってしまい、さらに妊娠していることが分かりました。ところが私は、テニスやゴルフに興じていました。第三子である次男が生まれたあとも変わりませんでした。しかし、仕事は順調ではありませんでした。ですの、せめて駐在中は生活を楽しもうと、家族もほったらかしにして自分だけが楽しむことを優先させていました。遊ぶことで仕事がいまいけないことをごまかしていたのでしょう。しかし、ストレスはたまる一方でした。あまり強くないお酒を

飲み、飲酒運転で事故を起こし、妻と会社に大きな迷惑をかけたこともありました。

実に、日の下で骨折ったいつさいの労苦と思ひ煩いは、人に何になろう。その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなし。人には、食べたり飲んだりし、自分の労苦に満足を見いだすよりほかに、何も良いことがない。これもまた、神の御手によることがわかった。実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができようか。

(伝道者 2・22〜25)

南アフリカまで孫の顔を見に来てくれた妻の父と母の前で、妻と大喧嘩(けんか)をしたことがあります。きっかけはなんだったか覚えていませんが、遠い地球の裏側までついてきてくれた妻をいたわりもせず、しかも妻の両親の前で大喧嘩をしたのです。義父と

義母はどんな思いだったのでしょうか。妻はどんな思いだったでしょう。私はそのようなことにも思いの至らない者でした。私に愛想を尽かしていた妻は、聖書を使って英語を教えてくださったミタさんという宣教師から福音を聞いて、イエス様への思いを持ち始めていました。

一九九六年二月、予定より一年早く四年で帰国となりました。思った成果を上げられなかったためです。しかも待っていたのは、それまでのキャリアとはまったく異なる部署でした。入社以来の知識は役に立たず、新しい知識を一から学ばねばなりませんでした。入社したての若い人たちよりも知識がなく、いちいち教えてもらわなければなりませんでした。とても忙しく、決算の時には徹夜が続くこともありました。まだイエス様を知りませんでした。この時へりくだる訓練を与えられたのだと思います。

話は帰国時に戻りますが、予定より早く帰国し

たため貸していたマンションの契約が残っており、社宅に入ることになったのですが、そこは吉祥寺集会会から十分のところでした。すでに吉祥寺集会のことを聞いて知っていた妻は非常に驚きました。そして、帰国後すぐに吉祥寺集会で、長女が通っていたヨハネスブルグ日本人学校の同級生のお母さんの葬儀が行われ、私も参列しました。葬儀会場には召された姉妹の喜びに満ち溢(あふ)れた顔の写真パネルが置いてありました。聞くと、召されるほんの少し前にとられた写真というではありませんか。死を目の前にしてどうしてこのような喜んだ顔ができるのだろうか、ひょっとしたら天国が本当にあるのかもしれない、と思いました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

(伝道者 3・11)

その年の八月に家内に誘われて夏の御代田バイブルキャンプに参加し、ベックさんに会って、救われました。四十歳まであと数ヶ月でした。それまで多少の挫折(ざせつ)や苦労は味わいましたが比較的順調な人生だと自分では思っていました。しかし、救われた時、それまで知らず知らずのうちに肩に負っていた重荷をイエス様に預けたような感覚と、幼子に戻って母の懷に抱かれているようなそんな感覚を覚え、喜びが湧(わ)き上がってきました。

まだ聖書を一行も読んでいませんでしたし、罪についても何もわかっていませんでしたけれども、一方的な憐みによって救われたのでした。一九九七年一月一日に御代田で妻と一緒に洗礼を受けました。ちょうど四十歳になったばかりでした。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならぬ。この

四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。あなたは、人がその子を訓練するよう、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならぬ。

(申命記 8・2、4・5)

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してください。たその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、…あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。(エペソ 2・4・5)

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

(マタイ 11・28・30)

集会の兄弟姉妹が救われる経緯は様々です。しかし、多くの場合は大変な試練を経てのことが多いのは事実です。しかし私の場合は、大きな試練に会ったわけではありませんでした。本当に主の一方的な憐みだったのです。救われたあとは、自分は本当に幸せだ、愛する妻がおり、三人の子供たちがおり、仕事と住む家が与えられている、そのうえ、主に救っていただき永遠の命の約束までもいただいている、なんて幸せなんだろうと思いました。

幸いなことよ。すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。あなたの妻は、あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶどの木のようだ。あなたの子らは、あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のようにだ。見よ。主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。

(詩篇 128・1・4)

救われた直後は、このみことばが自分の上に実現した、と単純に喜んでいました。しかし、仕事の大変さは変わらず、より一層忙しくなっていました。一方、

日曜礼拝やバイブルキャンプなどによって自由になる時間が減ったことから、友人や会社の同僚よりも窮屈(きゅうくつ)な生活になってしまったという思いと、救われた喜びとが、ないまぜになった信仰生活でした。私には肉の性質がきわめて強く、それは今でも少しも変わらないのですが、そのため少しづつこの世の生活と信仰との間で苦しむようになったと思います。イエス様が私のうちに住む罪の性質を私に教え始められたでしょう。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのため

あなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

(ガラテヤ 5・16・17)

そのような時に、二〇〇七年にドバイに三度目の駐在に行きました。ドバイに転勤になったのはイエス様の御心であり、きつと信仰者としての役割があると勇んで赴任しましたが、それは私と妻の訓練のためでした。当時大学生の長女と高校生の長男を高齢の義母にお願いして日本に残し、妻と中学生の次男との三人でドバイでの生活が始まりました。

物質的な欲望の権化(ごんげ)であるかのようなドバイの街、移動手段がないために籠の鳥のような生活の中で苦しむ妻と次男、インターナショナルスクールでは言葉の問題でも苦労した次男、そして日本に残した長女と長男の心配。そんな中、日本に残してきた長女に問題が起きました。私たち夫婦の信仰が試されました。この時、人の思いや言葉にはなんの

力もないこと、イエス様だけが問題を解決してくださる方であり、イエス様だけが頼るべき方であることを、いやというほど教えられました。

あなたは自分の惡に抛り頼み、「私を見る者はない。」と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。

(イザヤ 47・10)

わたし、このわたしが、主であつて、わたしのほかに救い主はいない。

(イザヤ 43・11)

二〇二年六月にドバイから帰国しました。私たちと絶縁状態で、その間に結婚していた長女と婿(むこ)と生まれたばかりの赤ん坊に、十二月に数年ぶりに会い、長女はその後再びイエス様に従うものとなりました。

靈の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

(ヘブル 12・10～11)

二〇一四年の一月に大阪にいる母が脳内出血で倒れました。寝たきりになり、十月に天に召されました。八十七歳でした。母は働き者で、争いごとを好まず、自分の思いを粘り強く実現する人でした。私がイエス様を信じるようになったことを話すと、こう言いました。「信仰の自由は日本国憲法が保障しているのだから、文雄が何を信仰するかは文雄の自由や、でも私には関係ない」

そのような母ですから本当に救われるのだろうか？と不信仰にも私は思っていました。母は寝たきりに

なつても、私がイエス様の話をすると遮(さえぎ)るように別の話をするのです。ベックさんに「母は病気になるつも僕の話聞いてくれない」と話すと、ベックさんは「親は息子からとやかく言われたくないよねえ」とおっしゃるのです。母が入院してから月に一二度、週末には大阪の病院に行き、日曜日に芦屋集会の礼拝に参加するようにしていました。母の救いを芦屋集会の兄弟姉妹方にも祈っていただきました。

山科兄弟姉妹が見舞いに行ってくださいようになり、母は山科兄弟姉妹からイエス様の話を聞き、最後にはイエス様を受け入れて救われたのです。息子の話は素直に聞けなくとも、集会の兄弟姉妹の話だと素直に聞いたでしょう。私たちの知らないところで、祈ってください、また、働いてくださる兄弟姉妹方に、そしてその背後にいて兄弟姉妹を動かしてください、くださるイエス様に感謝でした。

母の葬儀は仏式で行われましたが、実質的には兄

が取り仕切りました。そんな中で、私も挨拶をすることができ、母がイエス様に救われたことを短く証することができたことは恵みでした。

次のみことばは、召される直前に母の枕元で読んだみことばです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえります。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きます。」

(ヨハネ 11・25)

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことは、信すべきものであり、真実である。」また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」

(黙示録 21・3-7)

また少し時間を戻しますが、ドバイから帰国後少し経った頃に、仙台集会へのメッセージ当番を仰せつかりました。他の当番の地と同様、仙台も所縁(ゆかり)があるわけではありませんでした。二〇一四年の五月に一度車で仙台まで行ってみようということになりました。帰りの車の中で、仙台のような地方の中核都市はとても住みやすそうで良いよね、などと

話していました。そうしたらその三日後の水曜日に、仙台への転勤内示を会社から言い渡されたのでした。まったくの驚きでした。イエス様のされることはいつも私たちの想像を超えています。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。
(イザヤ 30・21)

今は仙台集会に集っていますが、地方の少人数の集会にはそれゆえの悩みがあります。仙台集会のために祈っていたできれば有難く、感謝です。

子供たちが小さい時、また義母がまだ若かった時は、夏は家族全員六人に犬も一緒に車に乗って御代田に集うのが恒例でした。今は、婿である長女の夫はまだ救われておらず、下の二人の息子たちも集会に集わなくなり、義母も高齢になり御代田まで来るのが億劫(おっ

くう)になったので、最近は御代田には妻と二人で集います。寂(さび)しい思いもありますが、いずれ家族でまた集える日を楽しみにしています。

大阪の父は九十二歳を超え老人ホームに入所しています。父の救い、また私の肉の姉と兄の救いも祈っています。

涙と喜びをともにした高校や大学のラグビー仲間、また会社の同期入社仲間や会社のラグビー仲間の救いも祈っています。機会が与えられた時にイエス様を伝えてはいますが、まだ時ではないようです。その時を待ちたいと思います。

私たち夫婦が集会に集い始めた時、何人かの兄弟姉妹には、何の問題もないあなたたちがどうして救われたのか、と不思議がられたことがあります。しかし、イエス様は人生において問題があるうとなかろうと(それもイエス様が与えられるのですが)、すべての人が救われることを望んでおられます。また、救い

に至る道は人それぞれです。イエス様は一人ひとりを異なった人としてお造りになったように、救いも一人ひとりオーダーメイドで救いになられます。

今こうして、二十年の信仰生活と、六十年の人生を振り返ると、私が救われたのは、奇跡としか思えません。ただ、思うことは、もしイエス様に会わなかったら、もし救われてなかったら、とても虚(むな)しい人生であつただろうと思います。想像するだけでも恐ろしくなります。ですから、友人たちがそのような思いをしなくて良いように、これから機会を捉(とら)えてイエス様を伝えたいと思います。もちろん、これも自分の力では決してできないことなので、イエス様に頼っていきたいと思います。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるので



夫の文雄さんと

主は私にかかわるすべてのことを
成し遂げてくださいます

杉本 淳子

あつて、ひとりでも減びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(2ペテロ 3・9)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして減びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。御霊を消してはなりません。

(1テサロニケ 5・16、19)

杉本文雄

一九五六年十一月三日生まれ

大阪府立八尾高校、神戸大学経営学部卒

住友商事株式会社勤務

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

(申命記 31・8)

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがあります多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。

(2コリント 4・8、9、15)

両親に愛されて育った私は、自分の思うままに生きることこそが最高の幸せだと思っていました。特に大きな悩み苦しみに出会うこともなく、結婚、出産、

子育てと、順調な人生を歩んでいると思っていました
が、目に見えるこの幸せの根拠がどこにあるのか、何
かを一つでも失えば脆く崩れ去ってしまうのではない
か、と不安を感じていました。

第三子を出産した三十五歳のときに、夫の二度目
の勤務先である南アフリカのヨハネスブルグで初めて
聖書に出会いました。

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつ
くり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべ
てを造る者。
(イザヤ 45・7)

陶器師を粘土と同じにみなしてよからうか。造ら
れた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかつ
た。」と言ひ、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」
と言えようか。
(イザヤ 29・16)

ものでした。ここに本物がある、ここに真理があると、天
地がひっくり返るほどの衝撃でした。

一九九六年、四年間の駐在生活を終えて帰国する
こととなり、心の安らぎを得るためにどこかの教会
に行きたいと思いましたが、吉祥寺集会には行かな
いと決めていました。集会で語られるメッセージや証
しの中に真理があることは理解できましたが、自分
にはまだ必要ではない、何かとんでもない困難や試練
にあったときに、ベックさんという宣教師さんに助け
を求めればよいと決めていました。夫をはじめ家族、
知人の救いを祈ったこともありませんでした。

当時鎌倉市にマンションを持っていましたので当然
そこに住むものだと思っていましたが、借りてくださっ
ていた方との折り合いがつかず、社宅で家があくのを
待つことになりました。会社が用意してくれた社宅
は吉祥寺でした。住所を確かめると、「光よあれ」の
巻末に記載されている吉祥寺集会のすぐ近くだとい

それまで漠然と神さまの存在は信じていましたが、
天地万物を造られた創造主なる方を初めて知りま
した。造り主なる方に信頼して生きたいと考えるよ
うになっていきました。

同じころ、南アフリカで生まれた息子に会いにきた父
が「死んだらどこに行くのだろう・・・」とつぶやまし
た。それまで弱みを見せたことがない父の弱められた姿
を目の当たりにしてもどうすることもできず、自分自
身が落ち込んでしまう始末でした。父は難病を患(わ
ずら)い、がんを併発しましたが、死を恐れていた私た
ちは最後まで告知することはできませんでした。父の
死後、がんで召された方の葬儀のテープを聞きました。
イエス様を心から信頼して自らの死と正面から向き合っ
ていらしたことが伝わってきました。また、ご自身がお
元気なときに多くの方にイエス様を伝えてきたけれど、
傲(ごう)慢だったと悔い改めていらっしゃいました。ベッ
クさんが語られたメッセージは今まで聞いたことのない

うことがわかりました。吉祥寺集会に行くこと自分の
したいことができなくなるのではないか、「寝ても覚
めてもイエス様」の生活になるのは嫌だなあとと思って
いた私ですが、そのときはイエス様が私の首根っこを
優しくつかみ、吉祥寺集会の上にとっとおろしてくだ
さったような気持になり、はやく集会に行ってみたく
まだお目にかかったことのないベックさんにお会いし
たいと思うようになりました。その後、夫の文雄も
イエス様に従う人生を歩む決心をしましたので、鎌
倉のマンションを売却し、吉祥寺に住まいを得ました。
二〇〇七年に夫の三回目の転勤でドバイに行くまで
の十一年間は、毎週ベックさんのメッセージをお聞きす
ることができました。国内外で開催される喜びの集
いでは、イエス様を見上げる者同士には、確かに同じ
喜びがあることを体験しました。兄弟姉妹方と共に
祈る恵みにも与り、信仰の先輩方の祝福に満ちた人
生の結末も見せていただきました。

ドバイへの転勤当時は私の母と同居しており、三人の子供たちと私たち夫婦の六人家族でした。高校生、中学生の息子たちを連れていくことは不可能に思え、当然単身赴任になると思っていました。ところがすべてが整えられ、主人、私、次男がドバイへ行き、母、長女、長男が東京に残ることになりました。ベック兄は「この転勤は会社からの命令だけど、本当はイエス様からのものだよ」とおっしゃいました。ミンヘン姉妹は「あなたは、ドバイでイエス様を体験します」と送り出してくださいました。

高校二年生の息子をおいていくことが後ろめたく、心配で、出発が決まっても私の心は重くてしかたがありませんでした。イエス様にお任せしよう、イエス様が守ってくださいと、いくら自分に言い聞かせても心が晴れず、この決断が本当に正しいのだろうかと思ひながら出発しました。出発の際、兄弟姉妹がたくさんのみことばを贈ってくださいました。そのみことばのカー

ドを飛行機の中で何度も読み返し、「イエス様、子供たちをよろしく願います」と祈りました。

ドバイに連れていった息子は、インターナショナルスクールでの最初の二年、大変苦労しました。苦しうに通学する息子を送りだし、帰ってくるまでイエス様に祈り続けました。また東京に残した長男のことも思わない時間はなく、常に時差を計算し今何をしているだろうか、何を食べただろうかと思ひ煩うてばかりいました。

「もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

(マルコ 9・22～24)

ある日、ベック兄のメッセージでこのみことばが示され

ました。私も、この父親と同様に、イエス様に助けを求めながら先のことを心配して、くよくよ悩む者でした。

長女が私たちに隠していた大きな問題が明るみにだされました。長女は家を出ていき、私たちに心を閉ざしてしまいました。なぜなのか、娘は何を思っているのか。私の何がいけなかったのか、この問題をどのような解決すればいいのか、まったくわからないお手上げ状態が続きました。長女は私たち親の手の届かないところで同棲を始め、その後結婚して一児が与えられました。結婚生活、子育てを通して悔い改めに導かれ、今では共に祈れる信仰の姉妹とされています。

次男が十六歳の誕生日を迎える直前、喉の痛みを訴え、単なる扁桃腺炎だと思っていきましたが、悪性リンパ腫の疑いがあるのですぐに手術をして病理検査をするということになりました。扁桃腺の手術自体は難しいものではないので、安心するようにと言われましたが、術後大出血し再手術となりました。ドバ

イの病院の処置室で大量の血を吐き青ざめていく息子が手術室に運ばれた後、主人と祈りながら待ちました。東京やドイツの兄弟姉妹が祈ってくださることが、大きな支えでした。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

(三ツ 1・21)

その後無事に回復し、病理検査の結果、腫瘍も悪い物ではないことがわかりましたが、この体験で「いのち」は主イエス様の御手の中にあることを味わいました。同時に、主イエス様にすべてを委ねているつもりでも、自分の思いを捨てきれないということに気が付かされました。

それでも、イエス様を知っていたことがどんなに大きな救いであるかを覚えて感謝でした。もし、この状況で主を知らなかったら、祈る対象を知らなかったら、もつと

もつと苦しかったことでしょう。次男は大学受験のために帰国し、私はドバイと日本を一年に何度も往復する生活を二年間続けました。この間に母は老人ホームに入居し、家族の形は大きく変化しました。

二〇二年三月十一日、地震の起こった日は一時帰国中で、ドバイに戻る準備をしていました。余震や計画停電、原発事故など先のまったく見えない状況で、未成年の息子たちをおいてドバイに戻ることがどうしてもできず、四月まで日本に残りました。振り返るとイエス様の優しいご配慮に感謝です。もし子供たちと離れてドバイにいたときにこの地震がおきていたら、私は心配でたまらなかつたと思います。私の信仰があまりにも小さいので、主が憐れんでくださったのだと思っています。

転勤が決まったとき、多くの兄弟姉妹が「きつとドバイで福音をお伝えするためですね」とおっしゃいました。私たちにはできないと思いましたが、心のどこかに、もしかしたら、何かイエス様のお役にたてるか

もしれないという高ぶった考えもありました。地方や海外に転勤された兄弟姉妹が新しい地で福音の種をまかれ、イエス様が実を結ばれた話を聞いていたもので、私にもそんなことができるのかもしれないと思っていました。実際は、私にはまったくできないことでした。まったくの敗北のように思えました。

しかしイエス様は、自分のことしか考えない自己中心的で、この世と調子を合わせて生きている私を明らかにしてくださいました。不思議なことですが、惨めな信仰を明らかにされるたびに、イエス様が私の中でどんどん大きくなってくださいました。

二〇二年ドバイから帰国した私たちは再び吉祥寺集会に集うようになりました。

二〇一三年、主人が仙台に転勤を命ぜられました。まったくなじみのない地でしたが、イエス様は会社が辞令を出す一年前から主人を仙台集会へメッセンジャーとして送ってくださいました。仙台集会の皆様ともす

でに面識があり、暖かく迎えていただきました。子供たちも成人し、次男は名古屋で働いています。長男、長女一家は東京、私は仙台と東京を行き来する生活です。

二〇一四年、主人の母が脳内出血で倒れ十か月の闘病の後、天国に凱旋（がいせん）しました。とても立派な義母で人の悪口を一切言わず、嫁である私は一度たりとも義母から嫌な思いを受けたことがありませんでした。半身不随で寝たきりとなつても決して泣き言を言わず、じつと耐え、最後には自ら一切の治療を拒否して食事も進んでとうとうとしなくなりました。肉体は弱められましたが必死に立派にふるまう義母をみて、はやくイエス様を知つて、天国の希望を持つてほしいと祈りました。

芦屋集会の山科さんご夫妻が義母を見舞ってください、祈ってくださいました。山科さんが「イエス様は幸子おかあさんを愛していらつしゃいます。それだけは忘れないでください」とおっしゃると、義母は、「それだけは忘れません」とはつきりと答えたそうです。その後、義

母は寝たきりで話すこともできなくなりましたが、主人が祈ると涙をながし、私の手をかたく握り返してくれるようになりました。お見舞いにいった長女が「おばあちゃん、天国でまた会いましょう。待つてね」と伝えるとき、手を天井に向けて「あーっ」と声を出しました。イエス様は確かに義母を救ってくださいました。

いつまでたつても自己中心な私ですが、イエス様に愛されていることを心から感謝しています。振り返ればすべてイエス様の憐れみでした。私はイエス様を知らなかつたのに、イエス様に知られていました。自分が自己中心でわがままだと気付かないで滅びの道をまっしぐらに進んでいましたが、イエス様は私のために十字架で死んでくださいました。死んだらおしまい、と思つて死を恐れていた私に、死は終わりではない、死んでから始まると教えてくださいました。

明日のことどころか一秒先のことさえわからない者ですが、すべてがイエス様のご計画であり、イエス様に間違